

第十一章 土地の地代——その性質と形成（八）

過去四世紀における銀価の変動に関する補論

銀価はなお下落中か——その根拠

欧州の富が増えれば貴金属の量も自然に増え、量が増えるほど価値は下がるという通念のため、多くの人は欧州市場で貴金属の価値は依然として下落基調にあると考えがちである。加えて、土地の粗生産物の多くで価格がなお緩やかに上昇している事実が、この見方をいっそう確からしくしている。

しかし、各国で富が増え貴金属の量が増えても、それだけで価値が下がるわけではない。金銀が富裕国に集まるのは、贅沢品や珍品が集まるのと同じ理由で、貧しい国より安いからではなく、高く売れるからである。要するに、価格の優位がそれらを引き寄せ、その優位が消えれば流入は自然に止まる。

穀物や、全面的に人の手で育てる野菜を除けば、家畜・家禽・猟獣、地中の有用な化石資源や鉱物など、土地の粗生産物は、社会が富み改良が進むほど自然に値上がりする。

したがって、これらが以前より多くの銀を要するようになっても、それは銀が本当に安くなり労働を買う力が落ちたからではない。高くなっているのは品物の側で、以前より多くの労働を要するようになったということである。上がるのは名目価格だけでなく実質価格であり、名目価格の上昇は銀の価値低下ではなく実質価格の上昇の結果にすぎない。